

「神の御心」

ヨハネの手紙第一

4:1～21

はじめに

言葉とは、相手に自分の思いや考え「心」を伝えるための道具の一つです。ですからその言葉の意味を理解することは重要です。しかしその言葉をどんな思いや考えをこめて使ったのかを知ることはもっと重要です。「だまって俺についてこい」、「絶対幸せにします」、「君の作ったご飯を毎日食べたい」、「一緒に歳を重ねて行こう」これらの言葉は結婚したいという思いを相手に伝える一般的な表現です。どの表現も「結婚」という言葉は使われていませんが、私たちはその言葉に込められた思いや考えを理解します。神の御言葉である聖書を理解する際も、この理屈は当てはまると考えます。なぜなら聖書もまた言葉で表されているからです。そんな言葉の一つひとつに、神はどんな思い「神の御心」をこめておられるのかという事を考えながら、今日の内容に入っていきたいと思います。

1. 霊を見分ける

【新改訳改訂第3版】

I ヨハネ

4:1 愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。

「霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。」つまり「霊」を見分けなさい、判断しなさいと述べられています。霊を見分ける…日本語でこのように聞くと何か特殊な能力が必要な、とても難しいことのように思えてしまいます。しかしヘブル語では「霊」のことをルーアハ(רוּחַ)と言い、人の「頭」を象り「頭、思考、計画」を意味する文字レーシュ(רֶשֶׁת)、[釘]を象り「掲げる(提示する)、定める」ことを意味する文字ヴァーヴ(וּפְּתוּחַ)、そして「柵」を象り、限りある命「人生」を意味する文字ヘット(חַי)が組み合わさった言葉となっており、これら三つの文字の意味を合わせると、「霊」とは頭に思い浮かんだ事が意思決定されて言動となり、人生の方向すなわち生き方、生き様となっていくことを表していると考えられます。一般的に「霊、霊的」という言葉を聞くと何か超自然的な力や現象と思われがちですが、ユダヤ人たちは「頭、思考」に影響を与え、人の行動、そして生き方に影響を及ぼすものをルーアハ「霊」と捉え、常に人に働き続けているもの、存在であると考えていたようです。そのように解釈するならばこの「霊」とは「知識、情報」とも言い換えることができると言えます。まさに「知識、情報」は私たちの頭に入り、どのような言動、行動をするかを意思決定させ、生き方を左右するものです。ですから霊を見分けるとは、様々な物事を見聞きすることで頭に入ってくる「知識、情報」が、神からのものなのか、そうでないのかを判断することであると考えられます。そしてそれを判断する、見分けることの必要性をヨハネは訴えています。「なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。」神からの「霊」つまり「知識、情報」とは神の御言葉、神のご計画であると言えます。これは私たちの思考、言動そして生き方を神の御心に沿ったものへと導きますが、そうでない「霊」すなわち神からのものでない「知識、情報」は、私たちの生き方

を誤った方向に導きます。ですから私たちにとってこれを見分けることは非常に重要であると言えます。そしてヨハネはこの見分けることについて、たった一つの方法だけを次に提示しています。

4:2 人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。

「霊」を見分ける方法、その基準は「人となって来たイエス・キリストを告白する霊」かどうかということであるとヨハネは述べています。「人となって来た」すなわち神が遣わされた神の御子としての、メシアであるイエシュアが存在とその働きを指し示す、証しする、信じさせる「知識と情報」であるかということが一つの基準であり、私たちはこの唯一の基準に従って「霊」を見分けるべきであるということです。

4:3 イエスを告白しない霊はどれ一つとして神から出たものではありません。それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていたのですが、今それが世に来ているのです。

「霊」とは私たちが普段見聞きしているあらゆる「知識と情報」のことであると考えれば、「イエシュアを告白しない霊」とは、イエシュアを否定、拒絶した考え方、またイエシュアという人としての存在は認めていても、神の御子、キリストすなわちメシアとしては認めない考え方による「知識と情報」であると言えます。このように考えるならば、私たちは今日なんと多くの「反キリストの霊」の影響を受けていることでしょうか。テレビ、ラジオ、新聞雑誌、書籍、インターネットなどの情報媒体、マスメディアによって流される「知識と情報」はそのほとんどが「イエシュアを告白しない霊」です。学校や会社で教えられたり扱われたりする多くの「知識と情報」もそうです。このように考えるならば、聖書に記された「知識と情報」すなわち神の御心、ご計画以外のほとんどすべてが「反キリストの霊」によるものであるということになります。このように、「反キリストの霊」すなわち「イエシュアを告白しない霊」は、私たちにとって決してかけ離れた存在ではなく、むしろ身近にあり、常に影響を与え続けているものなのです。それは時に「一般論」、「科学的な証拠」、「専門家の意見」などに姿を変え、快適な暮らしに役立つ耳よりの情報、幸せで成功的な人生を送るための知識として私たちに働きかけてきます。しかしそこにイエシュアを求めさせるものはなく、それどころか神を無視した考え方、人を中心とした人のことだけを考えた生き方に満ちており、神のご計画から目を背けさせるものばかりです。そこにイエシュアは、「救い」はありません。「今それが世に来ている」ことを知り、私たちははいよいよ「反キリストの霊」ではなく、「神からの霊」すなわち「イエシュアを告白する霊」、イエシュアを指し示す、目を留めさせる「知識と情報」である聖書の御言葉に目を留め、耳を傾けなければならない状況に置かれていることを知ってください。

ですから結論的に「霊」を見分けると言ってもイエシュアを指し示す「知識と情報」である聖書以外のものからくる、人のための「知識と情報」はすべて「反キリストの霊」と言っても過言ではないので、これを見分けるために私たちが何よりもまずすべきことは聖書を知る、学ぶことです。なぜなら本物を知らずして偽物を見破ることなど絶対に不可能だからです。すなわちイエシュアご自身を、イエシュアを告白するものがどのようなものであるかを知らないで、偽物である「反キリストの霊」を見破ることなどできないということです。反キリストは「羊の皮をかぶった狼」にたとえられるように、イエシュアの言動や

行動を巧みに真似てくるのです。ですから偽物を見破るにはまず本物をよく知らなければなりません。イエシュアを、イエシュアが語られた御言葉、御業に表された神のみ旨、御心、そのご計画を知ることが求めましょう。

4:4 子どもたちよ。あなたがたは神から出た者です。そして彼らに勝ったのです。あなたがたのうちに
おられる方が、この世のうちにいる、あの者よりも力があるからです。

「反キリスト」とはもちろんキリスト、メシアに逆らう存在を指しますが、この「逆らう、逆らって立つ」ことをヘブル語でサターン(ἰψῆ)と言い、あの悪魔であるサタンという呼び名はこれに由来します。つまり「反キリストの霊」とは「悪魔、サタンの霊」とも言い換えることができます。サタンは私たちの目をイエシュアから、神のご計画から離そうと狂暴かつ巧妙に働きかけてきます。しかし恐れることはありません。私たちの神はサタンよりも力ある神です。サタンがどのような手段で私たちを神から引き離そうとしても、神がご自分のものとして私たちを握っていてくださるなら、決して力負けすることはありません。なぜならこのように記されているからです。

【新改訳改訂第3版】

ローマ人への手紙

8:35 私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、
飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。

8:38 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来る
ものも、力ある者も、

8:39 高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、
私たちを引き離すことはできません。

私たちをメシアであるイエシュアにある「神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」たしかに神はサタンよりも力ある御方ですが、私たち人自身はこのサタンの前に弱く愚かです。サタンの霊、「反キリストの霊」の影響は、どんなに信仰のあるクリスチャンにも及び、時に罪を犯させます。そしてその罪責感によって意気消沈し、失望落胆し、神に目を上げることができなくなることがあります。しかしたとえ私たちが神から離れようとしても、この御言葉にあるように、神は決して私たちを掴んだその手を離されないのです。ですから私たちはサタンを恐れることも、自分が神に見捨てられてしまうという恐れを持つことも必要ないのです。この信仰を持つことは非常に重要です。ですからもう一度言います。「死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主メシアであるイエシュアにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」

4:5 彼らはこの世の者です。ですから、この世のことばを語り、この世もまた彼らの言うことに耳を傾
けます。

この「彼ら」とは、多くの「反キリスト」のことです。彼らの「霊」、「反キリストの霊」はイエシュアを否定し拒絶する「知識と情報」であると述べました。それがここでは「この世のことば」と言い換えら

れていると考えられます。つまり今や私たちが置かれている「この世」自体が「反キリスト」と同様のもの、あるいはそれそのものであると言えるのです。日本語が日本人に理解され用いられているように、「反キリストの霊」は「この世」に受け入れられているということが示されていると考えられます。

4:6 私たちは神から出た者です。神を知っている者は、私たちの言うことに耳を傾け、神から出ていない者は、私たちの言うことに耳を貸しません。私たちはこれで真理の霊と偽りの霊とを見分けます。

先の「この世」とは、この節では「神から出ていない者」と言い換えられていると考えられます。そして私たちは「神から出た者、神を知っている者」であると述べられています。しかし神から出る、すなわち遣わされ、神を完全に知っておられる御方はイエシュアただ御一人です。ですからこの表現は私たちがイエシュアに結ばれている、イエシュアとともにある者であるという意味に捉えるべきです。なぜならイエシュアの存在なくして私たちが神と結ばれ、神を知ることができないからです。ですからここに記されている「私たちの言うこと」とは単なる言葉ではなく「イエシュアを告白する」こと、イエシュアについての聖書の御言葉です。私たちはイエシュアについて語ることで、それを聞く者が「神から出た者」であるか、「この世の者」すなわち「神から出ていない者」であるかを見分けることができると述べられています。

2. 愛

4:7 愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。

これは前回のメッセージで述べたことですが「互いに愛し合ひなさい」とはヨハネの福音書 13 章～14 章で語られたイエシュアが父のみもとに行き、そして父の家に弟子たちを迎えるために再び戻って来られるという、神のご計画を示す中で語られた戒めです。ですからこの戒めは単に仲良く平和にすごしなさいという類のものではなく、御父のみもとから再び来られる、再臨されるイエシュアを覚え、待ち望むことであると述べました。また聖書に記された「愛」という言葉の持つその意味を「この世」と同じ概念で捉えるべきではありません。それは「反キリスト」に通じるものだというのが筆者ヨハネの見解です。彼は「愛は神から出ている」と述べています。文脈からしてこの「愛、愛する」とは、「神から出て」すなわち御父から遣わされた御子イエシュアのことです。まさに

【新改訳改訂第3版】

ヨハネの福音書 3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

と記されている通りです。神は言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実をもって「世を愛された」のです。それが「ひとり子」をお与えになるという行為となりました。そしてその目的は「御子イエシュアを信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」と記されている通りです。ですから「愛する」とは究極的には、「永遠のいのち（を与える）」という意味であると言えます。

4:8 愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。

ここに記された「愛」もやはりイエシュアと捉えるべきです。つまり「愛のない者」とはイエシュアを持たない、信じない、受け入れない者であり、そのような者に「神はわかりません。」ということだと言えます。「なぜなら神は愛だから」すなわち御父と御子イエシュアとまったく一つであられるからです、という意味であると考えられます。

4:9 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。

このように、イエシュアによって「神の愛が示された」つまりイエシュアこそが「神の愛」であり、「神の愛 = イエシュア」であることがはっきりと述べられています。

4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

当然のことながら、私たち人がイエシュアを神に与えたのではなく、神が私たちにイエシュアをお与えになったのです。「私たちの罪のために、なだめの供え物として」神が私たちに御子イエシュアを遣わされたのです。そしてこのイエシュアによって「私たちに、いのちを得させてくださいました。」すなわち私たちが永遠のいのちを受ける者としてくださったのです。「ここに愛があるのです。」これが愛である、これこそが愛であるとヨハネは述べているのだと考えられます。つまり神の愛はイエシュアの中に完全に表されており、イエシュアこそが神の愛のすべてであり、イエシュアの他に神の愛を表すものはないということです。

4:11 愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちが互いに愛し合うべきです。

ですから「愛する者たち」とは、神からイエシュアを与えられ、それによって罪を赦され、永遠のいのちを与えられる者という意味であり、そして先ほども述べたように「互いに愛し合う」とは、お互いがイエシュアに目を留めることができるよう勧め合い、イエシュアについて教え合い、イエシュアに対する信仰を励まし合うことであると言えます。教会とはまさにそのことのために、「互いに愛し合う」ために存在する集まりであるべきだと信じます。

4:12 いまだかつて、だれも神を見た者はありません。もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。

「だれも神を見た者はありません。」この言い回しは、ヨハネは福音書でも用いており、そこではこのように記しています。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネの福音書

1:18 いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。

この御言葉は先の 4:12 の言い換え表現であると考えられます。すなわち 4:12 の「互いに愛し合う」という言葉が「父のふところにおられるひとり子の神」という言葉に言い換えられているということです。つまり「互いに愛し合う」関係とは、父なる神と御子イエシュアの間を指し示しているということです。これは一般的に捉えられている父と子の親子愛を指しているではありません。人を自分の子のように愛しなさいと言っているのではないのです。先ほども述べたように、そのような解釈は「この世」の考えであり「反キリストの霊」によるものです。ですから次のように考えるべきです。かつてイエシュアは御父とご自分との関係についてこのように述べられました。

【新改訳改訂第 3 版】

ヨハネの福音書

14:10 わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているものではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。

「わたしが父におり、父がわたしにおられる」この表現はまさに「父のふところにおられるひとり子」です。そしてその内実はこうです。「わたしが自分から話しているものではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。」父が言われるまを語り、父に代わって父のわざ、父の仕事を行う、すなわち父の計画を実行し、そして完成させる、それが子であるという父と子の関係こそが「互いに愛し合う」という言葉に込められた意味であり、まさしくそれは神の御子イエシュアとその働きを指し示していると言えます。ですから「互いに愛し合う」ことで「神の愛が全うされる」とは、父なる神のわざを行う御子イエシュアによって、神のご計画が全うされる、完成されるという意味であると考えられます。

3. 御霊

4:13 神は私たちに御霊を与えてくださいました。それによって、私たちが神のうちにおり、神も私たちのうちにおられることがわかります。

この御霊もイエシュアと同様の働きを持った存在です。イエシュアはこのように述べられました。

【新改訳改訂第 3 版】

ヨハネの福音書

16:13 しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くまを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。

「御霊は自分から語るのではなく、聞くまを話す」存在だということです。それはもちろんイエシュアがそうであるように、父なる神の言われることを「聞くまを話す」ということです。この御霊が冒頭で述べた「神からの霊」であり神からの「知識と情報」を私たちに与えてくださる存在です。まさに「やがて起ころうとしていることをあなたがたに示す」と述べられている通りです。神は御霊によってご自分の計画を私たちに教えてくださいます。

4. ヨハネの強調点

4:14 私たちは、御父が御子を世の救い主として遣わされたのを見て、今そのあかしをしています。

この手紙の筆者であるヨハネもまた、「いまだかつて、神を見た者はいない」と述べたように、神を見た者ではありませんが、神の御子イエシュアには実際に出会い、召し出されて弟子となり、イエシュアとともに歩むことでその御言葉と御業に触れ、「御父が御子を世の救い主として遣わされたのを見た」という証しができる数少ない人物の一人です。彼の証しは自身の体験に基づいていることがここで主張されています。つまり「イエシュアをこの目で見た私が言います。」と言わんばかりに、次に自身が語る言葉の真実性を強調しようとしていると考えられます。つまり次の節がヨハネの結論的に強調したいメッセージであると考えられます。次の節はこうです。

4:15 だれでも、イエスを神の御子と告白するなら、神はその人のうちにおられ、その人も神のうちにあります。

「イエシュアを神の御子と告白する」こと、これが「神はその人のうちにおられ、その人も神のうちにいる」ことを示す一つの基準であるとヨハネは述べています。では「…のうちにおられ…のうちにいる」とはどういう意味でしょうか。ヘブル語ではここにシャーハン(שָׁחַן)「住む」という意味の動詞が使われています。そしてこの言葉の最初の言及である創世記 3:24 にこのように記されています。

【新改訳改訂第3版】

創世記

3:24 こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。

ここで「エデンの園の東に…『置かれた』」と訳されているのが聖書で最初のシャーハンです。このように、本来シャーハンとは、単に住むという意味ではなく、エデンの園に「いのちの木への道」を守るために「置かれる」という意味であることが解ります。またケルビムとは、神の最も近くで仕える御使いです。つまり「神はその人のうちにおられ、その人も神のうちにいる」とは、最初の人アダムが、かつてエデンの園でそうであったように、いやそれ以上の親密な関わり、交わりをもって、神と人がともにシャーハン「住む」ことが指し示されていると考えられます。そしてそれは「イエシュアを神の御子と告白する」者に与えられるということであると考えられます。これは御父である神のご計画の完成を表したものであり、御子イエシュアはこれを果たすために遣わされたという、前の節でヨハネが強調をもって述べようとした理由だと考えられます。そしてヨハネの神のご計画の完成についての強調はさらに続きます。

4:16 私たちは、私たちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛のうちにいる者は神のうちにおり、神もその人のうちにおられます。

「神の愛」とはすなわちイエシュアであると述べました。「神の愛」であるイエシュアを「知り、また信じる」こと、これは前の節の「イエシュアを神の御子と告白する」ことの言い換えだと考えられます。つまり訳も分からないでただ告白すれば良いということではなく、「神の愛」の現れとしてのイエシュア

の存在とその働きを「知り、また信じる」ことが「イエシュアを神の御子と告白する」ことであると述べられていると考えられます。神の御言葉はおまじないや呪文のようなものではありません。その意味を知る、理解する必要があるということです。

そしてこの節にも前の節と同じような「…のうちにいる」という表現が見られます。しかしここで使われているヘブル語は、先ほどのシャーハンではなく、アーマド(ἄμαδ)「立つ、耐える」という意味の動詞が使われています。この言葉の最初の言及も見てみましょう。

【新改訳改訂第3版】

創世記

18:8 それからアブラハムは、凝乳と牛乳と、それに、料理した子牛を持って来て、彼らの前に供えた。彼は、木の下で彼らに給仕をしていた。こうして彼らは食べた。

この出来事はアブラハムが三人の神の人を御馳走(ごちそう)でもてなす場面です。ここで彼が「給仕していた」という部分に聖書で最初のアーマドがあります。このように、本来アーマドとは、食卓、ごちそうを囲んで「神をもてなす、神に仕える」という意味があることが解ります。使われている箇所は違いますが先ほどのシャーハンもこのアーマドも、神と人との関係、交わりを指し示していると考えられます。つまり御子イエシュアによって果たされる神のご計画の完成とは、シャーハンに示される「エデンの園」における、アーマドに示される「食卓の交わり」のようなものであると考えられます。このように、ヨハネは二つのヘブル語を用いて神のご計画の完成を指し示し、二度にわたって強調していると考えられます。

5. 恐れを締め出す

4:17 このことによって、愛が私たちにおいても完全なものとなりました。それは私たちが、さばきの日にも大胆さを持つことができるためです。なぜなら、私たちもこの世にあってキリストと同じような者であるからです。

4:18 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。恐れる者の愛は、全きものとなっていないのです。

神のご計画の完成である「エデンの園における神と人との食卓」、これが実現する日、それは同時に罪人に対するさばき、「刑罰」が下る日でもあります。イエシュアを信じ、そして神のご計画を知る者は「大胆さを持つ」とあるように、この日を喜び待ち望みます。「全き愛は恐れを締め出します。」とは、イエシュアによって果たされる神のご計画を知り、それを喜び迎えることであると考えられます。つまり神のご計画がどのようなものであるかを理解していない者は、神が自分に何をなさろうとしているのか解らないので「恐れ」てしまうわけです。神のさばきに対する「恐れを締め出す」には、イエシュアを知り、神のご計画を知ることが必要です。

4:19 私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。

「神がまず私たちを愛してくださった」すなわちイエシュアを与えてくださった、イエシュアによって、イエシュアの十字架によって私たちの罪が赦され、イエシュアによってなされる神のご計画の完成である

「神の国、御国」とも呼ばれる「エデンの食卓」に迎え入れられる特権を与えてくださったことによって、「私たちは愛しています。」すなわちその特権に与る者であることを信じるようになりました。

6. 兄弟を憎む

4:20 神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。

4:21 神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。

「兄弟を憎む」とはつまり先ほども、また前回のメッセージでも述べたように、「互いに愛し合いなさい」という戒めを与えられたイエシュアが父のみもとに行き、父の家に私たちのための場所を備え、花婿が花嫁を迎えるように再び来られるという、再臨のご計画を待ち望むことをせず、またそれを待ち望む兄弟たちを拒絶、否定し、神のご計画を受け入れない、逆らうことであると考えられます。私たちは「互いに愛し合いましょう」、すなわち「主イエシュアよ、来てください。」と告白し合いましょう。

7. 御心を求める

神の御言葉である聖書が、絵や造形や音声ではなく、文字による言葉によって表されている以上、その言葉の持つ意味をどう捉えるかで、その理解は大きく変わってきます。4:5 についての部分で述べたように、「この世のことば」の持つ意味は「反キリストの霊」すなわち神のご計画の理解を妨げる、目を逸らさせる「知識と情報」の影響を受けています。ですから今回取り上げた「霊」や「愛」、また「…のうちにいる」などのように、聖書に記された一つひとつの言葉の意味を、今一度問い直す必要があると思われる。神がどのような思いを込めてその言葉を用いられたのか、という問いかけは、聖書を読み解く上で必要な心構えであると思われる。それが私たちの祈りである「神の御心を求める」ということであると思われる。言葉は思いや考え「心」を伝えるための道具であると述べました。これからもますます聖書に記された御言葉の一つひとつに込められた神の思いや考え「神の御心」を探り求めていきましょう。